

---

# さっちゃんとかーくん

薬丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さっちゃんとかーくん

### 【Nコード】

N4755Z

### 【作者名】

薬丸

### 【あらすじ】

ごくごく平凡な中学一年生であるかーくんの前に突如として現れた奇跡のような少女であるさっちゃん。見目麗しき少女にはどうやら自分を追いかける理由があるそう？更に天使如き少女には色々な裏事情があるようで！

さっちゃんに振り回されるかーくんに振舞わされる周囲の人間の日常風景を主軸に、何故さっちゃんがかーくんに付き纏うのかという理由と共に描いていこうと思います。

## 初めに（前書き）

初めての作品投稿です。尊敬する色々な作品の影響を受けまくってます。

試し試しにやっで行こうと思いますので、読みづらい点、誤字脱字、意味不明な言語等あると思いますので、指摘してくだされば嬉しいです。

## 初めに

僕の事を下らないと唾棄してくれている友人がいる。

最上の友人であるところのかーくん。

僕に欠けているもの、足りないものを全部補ってくれる唯一の存在。憧れの対象とか尊敬の対象とかじゃなく、畏怖するべき対象と言ってもいい・・・ああ駄目だね、そんな感情を向けること自体がおこがましいか。

だから齒痒い事に、彼をどれだけ褒め称えたくて誉めちぎりたくても、僕にはかーくんの至高さを伝えることは出来ないんだよね。

言っておくと、もちろんこれは僕の中での評価とかじゃなく、世界基準で人類史上とかのレベルだから要注意。

でも彼のことを説明せざるを得ないと・・・とにかく抽象的に、かーくんはすごいんだ！と言うしかないかな、馬鹿っぽくね。

実際僕が馬鹿だから伝えられないんだけど・・・そうやって茶化してる風にもしないと情報の齟齬が怖いんだ。

だってそうじゃないと、もし僕の言葉が歪曲されて理解され、僕がかーくんの事を誤解しているように受け取られて、それをかーくんが知った日には、死ぬしかないから。

これが僕がかーくんに抱く感情の一部。

万の論文を約しに訳して千に選別し、千の説明を濾過して純度を上げて百に纏め上げ、百の文章を凝縮して十に抜き出し、十の言葉から真実を抽出して一に至らせるならば。

愛。

俺の事を素晴らしいと愛を振り撒いてくる人間がいる。

最悪の他人であるところのさっちゃん。

俺達普通の人間からしたら色々なものが飛び抜けてる規格外な存在。人が至れる極致をなんの躊躇いもなく踏破し、あらゆる事象を平然とやってのける。

あいつは何が出来るかを上げるかより、あいつには何が出来ないかを数えるほうが早い。

だから俺があいつを指すときは大体馬鹿と呼ぶ。

馬鹿っぽい存在なんだ。漫画とかの住人。現実にいるのに嘘っぽい。しかも善を突き抜けさせて悪を排除しきって行動する正義そのもので、人格は褒めたる点しかないってんだから手に負えない。

間違いなく断言しよう、圧倒的大多数の人間はあいつに好意以外の感情を向けることは出来ない。

まあ俺はごくごく普通に嫌ってるけど。

だってさ、その麗しき超人様はなんの因果か平凡な一般人たる俺をすげーすげーと言ってかまって来やがるわけ。

どうすりゃいいんだよ。

つかなんで俺がこんな意味わからん支離滅裂な説明しなきゃならんのよ。

面倒だから死ぬか死ね。

・・・最後のはもちろん自分に向けての発言です。

これが俺のさっちゃんに抱く現実の全て。

一言で言うなら。

謎。

## 初めに（後書き）

まだ始めたばかりでよーわからん感じですね。この話以降も頑張っ  
ていきたいです。

## 01・前段階（前書き）

とりあえず切り良く書けるところまで。

## 01・前段階

中学一年生というのはどういう時期だろう。もちろん男女の違いはありつつ、適当にまとめてみる。

子供ながらに大人に憧れ始めたり、将来が光り輝く眩い素晴らしいものだと思ひ始めたり、

男女の違いにどぎまぎし始めたり、優劣の差を意識し始めたり、とにかく何かが始まる年だ。

納得できない方々には大雑把に、青春真っ盛りな時期と言ってしまえば丸く収まるのだろうか。

とはいっても今はまだ四月の下旬、入学式から二週間ほどしか経過していない。

何かが始まっていることに気づけるほどの余裕はないだろう。いくら順応が早い子供とはいえ、環境に対する慣れとはまだまだ縁遠い。

「具体的にいえばまだまだ寝れる時間があるのに、小学校時のやたらと健康的な生活習慣を崩せない、とかさ」

AM6:30

アラームが設定された遙か前の時間を指す置時計に目をやり、今だ使われた事のないアラーム機能を解除。

一度目が覚めると眠気がどこかに飛んで行く割と嬉しい体質なので、潔く二段ベット下段から抜け出して顔を洗いに行く。

部屋に備え付けられたユニットバスに向かい、顔を洗って歯を磨き、寝癖の有無をチェックして手と水である程度形を整える。

そして寝巻きのまま食堂へ。  
そう、食堂である。

ここは学園の敷地内ギリギリにある男子学生寮、更に言うならビジネスホテルクラスの設備を完備した全国でも稀に見る学生寮なのである。

と、ここでこういう風に紹介をしておけば、この学園が特殊であるという受け入れ態勢が整うだろうという打算があるので心積りをよろしく願います。

「なんて自分で言い聞かせなきゃいけない程、まだまだ非日常だよな」

独りごちている間に食堂に到着。

いくつもの長テーブルに簡素な丸いすが置かれた広いTHE食堂には人っ子一人いない。

そういう時間を狙ってきているので当然なのだが、やはり物寂しい風景である。

が、あと三十分もすれば人で溢れかえってどうしようもなくなるので、一人静かにご飯にありつける方が幸せな自分としては、朝練の生徒と通常生活の生徒の間隙であるこの時間帯は逃せない。

「すみませーん、美味しい朝ごはんください」

カウンター越しから第二陣の準備をして厨房に引っ込んでいるであろう寮監殿に呼び掛ける。

「あーはいはい、ちょっとだけ待ってねー」

イエス、今日は良い朝です。

返ってきた若い女性の柔らかな声に小さくガッツポーズをする。

「はい、お待ちどうさまー。うん、やっぱり君だったんだ、毎朝早

起きでえらいわー」

見た目二十代前半のおっとり美人が食事の乗ったお盆を持ってきてくれた。

「小学生の時の習慣が抜けないだけです、きっとすぐ自堕落です」

「あらそうなの？でもそういう習慣って抜けないからきつと習慣になっただんだと思うわよー」

「そうですかね？でもこうやって椿さんと話せる時間が作れるなら俄然続けますけどねー」

「くすつ、本当に君はおませさんだわー。うん、この台詞言ってみたかったのよねー」

「言われてみると若干気はずかしいですね。と、忙しいのに時間取っちゃってすいません」

「いいのよーこうやって食べてくれる人のことを知るのは今後の活力になるのよ？」

「真摯ですね、いい大人のお手本ですよ本当。じゃあ美味しくいただきますてもらいます」

「はい、それじゃあ今日も一日頑張つてねー」

「はい、椿さんも」

そう言つて美人寮監の椿さんと別れる。

白いご飯とお味噌汁、漬物と焼き魚、海苔という見事なテンプレートを前にして手を合わせる。

五人いる寮監の個人的に一番の当たりである椿さんを引けたことに對する感謝、もとい今日も美味しい朝ごはんに預かれることに感謝する。

「いただきます」

手を付け始めるとそこは成長盛りの子供なわけで、10分もせずに完食いたしました。

「ごちそうさまでしたー、良く噛む習慣つないといけないのに、まなならんなあ」

こつも美味しいとかき込んだじゃうよねーと諦観を滲ませてお盆を持つて返却口に行く。

そうして返却口傍にある洗い場で食器を丁寧に洗う。

定食屋では置きっぱなしで回収、またはローラーに乗っけて厨房の洗い場にまっしぐらというのが普通なのだろうけど、ここは教育機関の一端であるわけで、自分で洗い物をしてからの返却と相成るわけだ。

一応洗浄機に突っ込まれるから洗わなくても衛生面では心配要らないのだが、洗い物は寮則で決まっており、守らなければ数度の注意の後に食事抜きとなる非常に厳しい罰則もある。

洗い終わった食器をお盆に乗せ、返却口のローラーに乗せて流す。そしてカウンターに寄り、

「ごちそうさまですー美味しかったです」

とお礼を言つて食堂を出る。

戻る間にもまだ人とはすれ違わない。

授業の開始が8：30。

寮の食事受け取り終了時間が8：00。

となると部屋着で食堂に行くとして7：30、制服で行くとして7：50ぐらいだろう。

そして現在の時間7：10である。

だいたい部活の朝練開始時間は6：30なことからして、間の一時間程廊下は無人である。

「思わず駆け抜けたくなるな」

もちろんそんなことをして、眠れる若獅子達を呼び起こして怒りを買いたくないので、粛々と部屋に戻る。

そうして部屋に戻ってきてまずやることは軽い筋トレとストレッチである。

幼少からの習慣でこの時間は軽いジョギングを行なっていたのだが、さすがに校内、学校近郊でそれをする勇氣はない。

だから代わりの運動として筋トレとストレッチをお隣の邪魔にならない程度でするようになった次第。

20分程こなして、シャワーを浴び、髪を乾かして制服に袖を通す。そうする頃にはボタンボタンとドアが開く音が聞こえ始める。

制服に着替えたらもうすることもないので、昨日の夜の内に仕度を済ませたカバンを手に取り、俺もボタンと音を立てて出発する。

制服と私服が半々の生徒に紛れつつ、いや紛れるというのも変な表現なのけれども、廊下を歩く。

と、すぐ近くで扉が開き、見知った顔が二名出てきた。

二人とも別クラスではあるが、何度か食堂でも話している割と仲の良い奴らだ。

「おっす伊藤君にモーリー」

「おはよう、今日は良い天気になるみたいだよ」

「ふぁーっ、とと、うっすー」

丁寧な返しをしてきてくれたのが美術の特待生である伊藤君で、欠伸混じりに気軽な挨拶をしてきたのがモーリーこと日本人とイギリス人のハーフであるチャラ男森君だ。

「用意早いね、日直？」

伊藤君は俺が手にもったカバンを見てにこりと爽やかに訊ねてきた。いつも早起きでこのぐらいの時間なのだが、部屋を出る時間は個々人でもちろんばらつきがあるわけで、伊藤君とは朝あんまり会わなかったから齟齬がある。

「いんや、いつもこれぐらいなんだ」

「まじか、その時間俺にくれ。まだまだ寝たりねえ」

「モーリーは時間やつてもその分無駄に使っただけだろうが、意味ねえよ」

「俺に対してはやけに厳しいなあい」

「はは、森君は遅くまでテレビとかラジオとか聞いているもんねー」

「ああ、伊藤には悪いとは思ってたけどな。迷惑かけないようにしてるし勘弁な」

「仲いいねーそしてその心構えはチャラ男としてかなりの高評価だ」

「チャラ男ゆーな」

一見正反対の二人、まあ一見どころか中身もだいたいぶ違っのだが、どうやら上手くやっているようだ。

そして食堂と玄関の分かれ道まで来た。

「それじゃあ学校で」

「またなー」

「おう、んじゃまた学校でーああそういえば、今日の当番椿さんだぜー」

うを、まじか！という声を背で聞き、俺はそのまま学園へ向かうのであった。

学校までは歩いて10分弱ほど。

まあこの段階で学園の大きさを理解してくれると嬉しい。敷地内でありながら歩いて10分かかる距離。

「これもまた非日常ってね」

まだ日常に定着していない通学路を歩きながら、運動部の掛け声なんかを聞く。

そろそろ朝練終了の時間だからだろう、やたらと声を出している部

がちらほら。

部同士で互いに競い合ってるようにも聞こえる。

そんな中陸上部の掛け声が聞こえてきたのでそちらに目をやる。

陸上部は走り込みを主とした朝練を行っており、その参加は有志としているのでさほど人数は多くない。

少し遠いが、その中にこれまた見知った顔を見つけたので手を振ってみる。

どうやら相手も気付いてくれたようで、控えめに手を振り返してきてくれた。

「真希ちゃんは足も綺麗だけど、心も綺麗だねー」

聞こえてないことを良いことに本心をさらけ出して、浮ついた心を隠す気もない軽い足取りで玄関口へ。

その途中だった。

強烈な圧力を身に感じた。

初めて感じるそれは無視を許さず、圧を感じた方向へと視線が向かう玄関口に入ってくる生徒を見るにはベストポジション位置、正面校舎の二階窓にいる少女と目があつた。

見つめあう先には優しい眼差しと綺麗な笑顔。

初めて見る顔だと断言できる、あんな金髪碧眼の超絶可愛い娘っこを見忘れるとありえないし。

思い悩んでる内に少女は背を向けて去ってしまった。

「・・・誰だろうか。うちの制服着てたけど」

見た事もないし、聞いた事も無い。

あれだけ綺麗であるなら上級生であれ同級生であれ噂が立ってもいいはずだ。

だけどそんなものは寡聞にして知らない。

「しかしなんだったのかね」

視線の圧力、あれはおそらく圧倒的な熱量だった。

笑顔ではあったが、仮面という事もありえるわけで、その熱が好悪のどちらに属するかは今分からない。

「はぁ・・・」

俺は無意識に溜息をついた。自分で気付かないほど自然に。

その溜息の意味がどういったものかはわからない。

けれど溜息をついた事に違和感を感じ、ハツとした。

期待と不安が入り混じったこの二週間の日常生活どころか、この短いながらもそこそこ頑張って生きてきた人生の中で、溜息をついた事が一度も無かったという事実気がついたのだった。

そして以前、苦勞性の父と交わした会話の断片が頭を過ぎった。

曰く、溜息は知らない内に積み重なって癖になると。

## 01・前段階（後書き）

だらだらと日常を書きました。日常がひっくり返る今後に対する溜めですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4755z/>

---

さっちゃんとかーくん

2011年12月16日06時48分発行